

私に力をくれたこと

秋田県能代市立東雲中学校

一年 簾内 茉優

小学三年生の春から始めたソフトボールを続けた
 と思います、私は中学でも迷わずにソフトボール部に
 入部しました。ボールがグローブに「パシン！」と
 入る音、ボールを打った瞬間、バットから伝わる振
 動が私をひきつけ夢中にさせました。

試合前後、父は必ず私たち姉妹のグローブの手入
 れをします。オイルを塗っては、ボールをグローブ
 にたたきつけるということを幾度となく繰り返し、
 形を整えていくのです。その姿を見ていると、私の
 心にもパワーが注入されていきます。

試合当日の朝、目覚めると、私は勝利をイメージ
 しながら布団から出ます。私はその時間が大好きで
 す。台所から母が朝食を作る音やにおいがしてきま
 す。母が慌てて作るおにぎりが試合の日の決まった
 我が家の朝ご飯です。漬け物と熱い味噌汁がのどの
 通りをよくし、体があたたまり一気に力がみなぎり
 ます。

また、私には、共にソフトボールに打ち込む双子
 の姉がいます。

姉はいつもさりげなく私のサポートをしてしてくれま
 す。投手をしている姉は、投手にとって嫌なタイプ
 のバッターの例を話してくれたり、バッティング

ピッチャーをやってくれたりして、私の力になって
 くれます。

姉は私とは性格が全く違っていて、どんな時でも
 マイペースです。周囲に影響されやすい私と違って、
 姉は自分の世界をしっかりとっていて、周りのペー
 スに乱されることはありません。いつも自分の意志
 で行動することが出来る姉を私は尊敬しています。

こうして大好きな家族に支えられて、大好きなソ
 フトボールに打ち込める幸せを満喫していた私は、
 この幸せが永遠に続くと思っていました。

ところが、この夏、私の心に一つぽっかりと大き
 な穴があいてしまいました。その痛みは癒える日が
 来るとは思えないほど、大きく絶望的な痛みでした。

それは、夏の総体の朝でした。カーテンを開けな
 がら「おはよう」と言う母の声のトーンが、明らか
 に低かったのです。頭の中をいろいろな想像が巡り
 ました。入院中の祖父の容体が、ここ数日よくない
 ことは知っていたし、もしものことを想定して「心
 の準備」をするよう親にも言われていました。

「じいじがね…」と声を詰まらせる母を見て確信
 しました。私は聞き返す言葉も出ず布団をかぶり、
 息をするのも忘れて泣きました。もう、いつものルー
 ティンは忘れていました。布団の中からも「よく
 聞いて…」と話し始める母の声が震えているのが分
 かりました。

「じいじはね、今日は、特等席から試合を見るん
 だって。病院にいと試合が見られないから、空か
 ら応援するんだって。」と言う母の声は、半分聞き
 取れないほどの小さな声でした。「だから、がんばれ。」
 と言われたものの、私はそんな気持ちには全くなれ
 ませんでした。なぜなら、亡くなった祖父は、普通
 のおじいさんとは違ったからです。

私たちがソフトボールを始めた頃から、祖父は、

私たちの熱狂的な応援団であり、アドバイザーでも
 ありました。練習小屋を作ってくれたのも、祖父で
 した。いつも私たちの側について、いつも分かっていた
 たかのようにアドバイスをして、病気で苦しいとき
 でも決して辛い顔を見せなかった「スパーおじい
 さん」なのです。私にとって特別な存在だったので
 す。

とても、大会に向かう気持ちにはなれませんでした
 が、両親に促されて、私は会場に向かいました。

その日の試合では、祖父の死を知った監督や仲間
 たちが、いつも以上に声を掛けてくれ肩をたたく
 励ましてくれました。素晴らしい仲間がいることを
 祖父が教えてくれたかのようにでした。仲間と声を掛
 け合い、失敗をみんなでカバーし合いました。その
 チームの一体感が、しまったプレーを生み、大会で
 優勝することができました。

空を見上げると「ソフトボールはすばらしい。試
 合の内容がよければ、勝っても負けても、達成感で
 満ちあふれる」というあの気持ちが込み上げてきま
 した。何度味わっても決して飽きることがないあの
 気持ちです。

私はソフトボールの楽しさや仲間と共に戦う喜び
 を姉や両親や祖父に教えてもらいました。もっと
 もっとうまくなりたいたいという夢をもらいました。大
 切なことをたくさん教えてくれた祖父に、活躍する
 姿をもっとたくさん見せたかったです。もっとヒッ
 トを打って、もっと難しいボールをさばいて見せた
 かったです。

だから、私は、祖父や私を支えてくれる人たちの
 気持ちを力に変えて、何事にも決して負けず、これ
 からも夢を追いかけ続けます。